

ぼつりぼつりと、軒先から雨の雫が落ちてくる。

秋と冬の境界に突然降ってきた雨は、あつという間に暗雲とともに幻想郷中を包み込んでしまった。まだ昼下がりでというのに、太陽の光が分厚い雲に閉ざされてしまっているから、辺りは仄暗い水の底のように冥く、まるで夜のようにも思えた。

冬先の、冷たい時雨。

冷たい雨は強くなったり弱くなったり疎雨になつたり密雨になつたりを繰り返して、屋根の瓦を、庭の葉を、縁側の先を、たんたんとしてとんと旋律を奏するように叩く。木琴を鳴らすように、しかし音は鉄琴のように澄んでいて、水溜りに波紋を広げるようにその音は雨の中に微かに響く。

そして、それはまるで滾る血が流るる生の拍動のようだと、そんな大袈裟なことを思いながら、妹紅は開け放たれた障子の間から暗澹とした空を眺めていた。

千数年、幾度となく見上げてきた空。揺るがない空。晴れ、曇り、雨、雪、風——天気は時々刻々と移ろい変わってゆくけれど、空自体はいつまでも変わることがない。

変わらず、揺るがず、

だから、空を見ているれば迷わない。

——それでも、やっぱり雨の日だけは迷ってしまう。

そんなことを徒然と思いつつ、妹紅は慧音の家の居間の壁に背を預けながら、何をするでもなく手持ち無沙汰に左手で髪を梳いていた。白く長い髪。昔は黒く短かった髪。

変化を持たぬ不死の身になったとはいえ、体の中でも髪や爪といった伸びる部位は永遠に再生し続ける。だから、成長が止まってしまったこの体も、実は完璧に成長が止まってしまったとは言えないのだ。

その再生し続ける髪は、突然振り出した雨の湿気を早速吸ってしまったようで、髪のアちこちがびよんぴよんぴよんと跳ねていた。髪が長い妹紅にとって、ただでさえ長い髪が湿気にやられて絡み合ってしまう雨の日は、あまり好いたものではない。

さらさらと、指は髪を梳き、

さあさあと、雨は地を打つ。

沛然、とまではいかずとも、それなりに雨は強く降っている。それでいてしばらく経つとまた弱くなり、そして止むかと思うとまた強く降り始めるのだ。——気まぐれな、猫のように。

朝方に霜が降り始めるほど冷え込む、名前の通りの霜月。この時雨もそろそろ曇りとなって、そして夜更け過ぎには雪

へと変わるだろう。——いや、今すぐにでも雪になりそうなほど、今日は一段と冷え込んでいる。突き刺さるといふ表現がしつくりくるような、そんな寒さだった。

「しつかし寒いな……」

頭の中を駆け巡るとりとめの無い思考を遮るように呟くと、その吐き出された言葉は白い息となってそしてふわりと消えていった。丁度今は、言葉に返してくれる友人も席を外しているから、寂しいけれどこうして一人で呟くしかない。要は暇なのだけど、生憎暇には慣れている。——放浪していた千年以上は、こうして過ごしていたのだから。

「何か飲みたいな……」

何もせずに考えているだけなのに、何故かお腹は空くもので。ただ座っているだけで、手足は外気に曝されて氷のように冷たくなっていた。

ご自慢の炎で手先だけでも温めてもいいのだけど、悲しいかなここは屋内、万が一火事でも引き起こしてしまったら、それこそ笑い者だ。それに、ここは慧音の家だ。——一番居心地が良い場所を、易々と自ら燃やす真似など、するはずもない。

それに、炎を焚いてもいい屋内は永遠亭だけだ。

「あそこはガンガン燃やしても怒られないしな」

はー、と息を吐いて、冷たくなった手足を擦り合わせる。

はー、と吐いても、ふー、と吐いても、出る空気は一緒なはずなのに、どうして吐き出される息は温かくなったり冷たくなったりするのだろうか。そう思い、試しにふー、と息を吹くと、その息は手を温めることなく指の間をすり抜けていった。

どうせ寒いなら、いつそのまま雪になってしまえばいいのに。冬ならば、雪の方が風情があつていいのにと、そんなことを思つて、

そして、ピタツと、

頬に温かい何かが触れた。

「そろそろ体が冷えてくる頃だろうと思つて、ココアを入れてきました」

目線だけを右へと動かすと、そこには頬に紅いマグカップを押し付けていた慧音の姿があつた。

上白沢慧音。

藤原妹紅の、無二の友人だった。

「……流石慧音、何でもお見通しだな」

「何でもではないですよ」

わざわざ自分の特等席まで持つてきてくれた慧音に感謝しつつ、淑やかな笑顔と共に差し出されたココアを、冷たくなった両の手で受け取る。掌に伝わってくる温かさが、痛いくらいに心地良い。